

## ■ピラミーデの「保育者と子どもの愛着形成理論」の具体的な展開

### ◆母子間の愛着から、保育者と子どもの愛着形成へ

日本に限らず欧米においても、伝統的な子育て理論は『母性愛』を根拠にしています。ヨーロッパでは母親たちが我が子を育てるのではなくて、他人に子育てを任せていた時代がありました。(※) その結果、乳児死亡率が高く国力の低下を恐れた時代の為政者たちは、母親が子どもを育てるべきだという啓蒙書が多く世に出ると共に、キリスト教のマリア信仰を普及させ『母性愛』を強固に確立したと考えられています。日本では、農耕民族的な風土が自然と母性的な受け入れが子育て観の土台でした。

子どもを集団で集める制度的な保育システム(ヨーロッパでは1800年代、日本では明治に入ってから)が設立と共に、保育の考え方に『母性愛』が取り入れられ、家庭で行われている母子間のか

わりや愛情の与えかたを、保育という集団においても求められて来ました。しかし、近年は家庭で育つ子どもと保育園で育つ子どもの研究が進み、子どもが家庭で母親に求める愛着と、保育園で保育者に求める愛着の違いも分かって来ました。さらに、保育園で育つ子どもは、集団における多様な関係、遊べる遊具やおもちゃの豊富さ、空間の大きさ、保育者が積極的に与える情緒的、社会的支援の有効性が理解され、先進諸国の多くが乳児からの保育を充実させています。

ピラミーデの四つの基礎石の一つである心理的な愛着(Psychological nearness)は、保育者と子どもの愛着を意味しています。そして、保育室で展開される遊びは、距離感(Psychological distance)のある関係で指導されます。



〈ピラミーデの乳児保育室。保護者と別れた子どもが遊びに入り易い環境が設定されています。〉



〈保育が始まるまで、保護者が子どもと一緒に保育室で遊ぶことを奨励されています。〉

〈写真はオランダ Cito 提供〉

※参照：「母性という神話」(ちくま学芸文庫) エリザベートバダンテール